

「日本の音楽」の認識の世代間比較： 山口県内のフィールド調査を中心にして

石井由理

The Perceptions of “Japanese Music” by Different Generations:
A comparison based on a field research in Yamaguchi Prefecture

Yuri Ishii

(Received September 26, 2008)

はじめに

平成18年12月に約60年ぶりに教育基本法が改正された。その第2条であげている5つの教育の目標のうち5番目には、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」(文部科学省, 2008a: 1)と記されている。平成20年1月に出された、学習指導要領の改正に関する中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」(文部科学省, 2008b: 52)によれば、次期学習指導要領の内容はこの目標を反映し、「自らの国や地域の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身につけること」を重要な改善事項に含めている。

平成20年3月に告示され、23年度、24年度からそれぞれ本格的に実施される新しい小学校および中学校の学習指導要領では、国語、社会科、音楽、図画工作、美術、保健体育等、多くの教科の内容にこの影響を見ることができる。例えば音楽では、小学校の5・6年生の歌唱の指導に用いられる教材については、「共通教材のほか、長い間親しまれてきた唱歌、それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など日本のうたを含めて取り上げるようにすること」(文部科学省, 2008a: 69)と述べられている。今後この学習指導要領に基づいて編集される教科書の中で、わらべうたや民謡などの曲数が増加することになれば、昭和40年代以降の教科書掲載曲の傾向が転換することになる。昭和40年代のわらべうたを用いた試みがあまり成果をあげずに終わった後は、わらべうたや民謡など近代化以前からの音楽形式を受け継ぐ曲は減少傾向にあるからである(石井, 2004; 2006)。その一方で増加傾向にあるのは、教科書用に書かれた合唱曲や、映画のテーマや歌謡曲などの現代の大衆音楽であり、言語と作曲者を除けば西洋の音楽とあまり違いがないものが多い。

西洋風の大衆音楽を好むのは日本の若者に限られたことではなく、アジア各国の音楽教育研究者が同様のことを指摘しており、音楽情報のグローバル化が生み出した傾向であるといわれている(Campbell, 1995; Marypraisth, 1999; Ho, 2002; Shah, 2006)。今回の学習指導要領改正における上記の変更は、グローバル化がもたらした西洋風大衆音楽文化の普遍化に対して、音楽教育を通して音楽文化の独自性を維持しようとする国家による試みであり、文化のグローバル化がもつもう一つの側面、ローカルな文化の自己主張の現われであるといえる。

学習指導要領改正でローカルな文化の自己主張のために選ばれたのは、共通教材に含まれているような長い間親しまれてきた唱歌や童謡、地方に伝承されているわらべうたや民謡であり、これらは「日本のうた」とされている。これらの中に日本の音楽文化独自のアイデンティティーが求められていることになる。しかし政策が意図するところが必ずしも現実を反映しているとは限らない。むしろ現実が逆だからこそ、それを変えようとして政策を作る場合のほうが多いのではなからうか。そこで本論文では、音楽文化のグローバル化がもたらしている現実を、政策を作る側ではなく、受ける側である一般の人々がもっている「日本の音楽」に対する意識を調査することで明らかにすることを試みる。具体的には山口県内の高校生と60歳以上の人々がそれぞれどのような「日本の音楽」観をもっているかを質問紙を用いて調査した。学習指導要領が「日本のうた」ということばに込めているような日本の音楽的アイデンティティーが一般の人々にどの程度共有されているのか、世代の違いによってこのアイデンティティーはどのように変化をしているのかを考えるための、一つの事例を提供したいと思う。

2. 分析に用いた資料

本論文での分析に用いた資料は、平成18年10月に山口県内の高校1校で2年生44人を対象に行った質問紙調査の結果および平成20年3月に同じく山口県内の長門市と小野田市で行った、60歳以上の人たち計38人を対象に行った質問紙調査の結果の一部である。双方に対して同じ方法による調査を試みたが、実際には、高校での調査は時間の都合上、質問項目と回答曲数を減らさざるを得なかった。また、60歳以上の人たちを対象とした調査では曲の題名が思い出せない、歌手名が思い出せない、などの理由から、その場で実施方法の修正をせざるを得なかった。

これらの理由から、必ずしも全く同じ方法での調査の実施とはならず、また比較分析の対象とする項目も「日本の音楽」と「好きな音楽・よく聴く音楽」の2項目に限定せざるを得なかったが、いくつかの条件の違いを考慮に入れたうえで得られた分析結果は有意義であると考えられる。

3. 調査の方法

この質問紙調査は、既に平成18年から20年にかけて東京学芸大学と山口大学教育学部で大学生を対象として実施したものをもとにしている (Shiobara and Ishii, 2006 ; 石井, 2008)。同調査では、戦後の学習指導要領に用いられた表現を分析した結果から得た「日本の音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」の3つの項目¹ (Ishii and Shiobara, 2007) に対して、学生に思いついた曲目を最大10曲まで (東京学芸大学での調査では「郷土の音楽」は最大5曲まで) 記述してもらった。そしてこれら3項目の他に、「好きな音楽、よく聴く音楽」の項目も設け、同様に最大10曲まで回答をするものとした。この作業の際、他者と相談をしないこと、同じ曲が別項目で重複してもかまわないことを説明した。

平成18年10月に山口県内の高校で行った調査は、国際理解教育を紹介する授業の中で生徒に参加してもらったものである。45分間の授業の一環で行ったものであり、時間が限られていたため、項目を「日本の音楽」と「好きな音楽、よく聴く音楽」の2つにしぼり、各5曲までを回答するものとした。

平成20年3月の60歳以上の人を対象とした調査は、山口県内3箇所において行った。最も多くの回答が得られたのは、長門市の公共施設で開催された地域の文化祭会場で行った調査で、回答者は長門市をはじめ近隣の各地から会場に来た人たちである。会場入り口近くの受付横で

協力を呼びかけた。本論文で分析に用いた60歳以上の人々の合計38の回答のうち、27はこの会場で得られたものであり、項目は大学で行った調査と同じ4項目、回答曲数も最大10曲までとした。ただし、曲の題名を思い出せない回答者も多くいたため、思い出せない場合には歌手名や演歌、軍歌などの音楽ジャンルでの回答でもよいものとした。二つ目の調査会場も長門市内で、健康相談に訪れた人たちの待ち時間に協力を呼びかけた。ここで得られた回答数は11である。前述の1つ目の会場と同様、曲目を思い出せない場合が多く、歌手名、ジャンル名でもよいものとした。また、この会場を訪れる人たちは友人同士が多かったため、思い出せない場合に曲名を友人に尋ねることが多く、厳密には1人で回答をするという条件には反している。しかし、ここでの調査は調査者が対面式で行っており、回答者たちは自分が尋ねたことに対して友人が答えた曲名は書いても、それ以外に友人が自分の意見としてあげた曲名については、それをそのまま自分の回答として書くという行為がなかったことは確認できている。残る4人の回答は、山口大学教育学部大学院の学生の協力を得て、小野田市内にある学生の自宅に集まる60歳以上の人たちに答えていただいたものである。本論文では、これらのうち、高校生を対象とした調査と同じ2項目についての比較分析を行う。

4. 分析の方法

分析する際の分類方法としては、大学生を対象とした調査の際に用いた以下のカテゴリーを使った。

- ① 日本の伝統音楽：これには実際に作られた年代が明治以降であっても、近代化以前からの音楽スタイルを継承するものも含めた。
- ② 唱歌タイプの曲：近代化の中で西洋音楽の理論に基づく普遍性をもつ音楽文化の形成を目指して日本人作曲家によって作曲された音楽とし、唱歌のほか童謡や教科書用に作曲された曲も含まれる。
- ③ 歌謡曲：この中には演歌、フォーク、J-pops など、様々な大衆音楽が含まれる。今回の調査では年齢が高い回答者もいたため、浪花節まで含むことになった。
- ④ 外国曲：外国のクラシック、民謡からポップスまで含める。回答は西洋のものがほとんどであったが、西洋以外の回答も一曲あった。
- ⑤ テレビ・映画のテーマ：番組のテーマのほか、番組中に歌われた曲も含む。実際の回答の多くはこども番組で歌われた曲とアニメーションのテーマである。
- ⑥ 県歌・市歌・校歌
- ⑦ その他
- ⑧ 不明

これらのカテゴリーは、大学生を対象とした調査において、回答を分類する作業の中で似ている傾向の音楽をまとめるうちに出てきたものであり、厳密にはもっと細かく分かれるものであろうし、どこまで近代化以前の特徴を維持しているものを伝統音楽とするか、歌手が歌っている番組テーマは③と⑤のどちらに分類すべきかなど、必ずしも100パーセント明確に分けられるものでもない。あくまでも回答の傾向をつかむための手段として用いたものであり、解釈によっては多少異なる結果になる可能性もある。また、これらの分類のほかに教科書に掲載されたことがあるかどうか分析に加えたが、全ての時代の全ての教科書を網羅したものではなく、教科書に掲載されたことがあるという事実が確認できたものに限られている。よって、本

論文で示した数は最小限の数字であり、教科書掲載曲数は実際にはもっと増えるものと思われる。

60歳以上の回答者の回答の中には曲名ではなく歌手名やジャンル名が含まれることは既に前述したが、分析の際にはこれらは1回あげられるたびに1曲分に当たるとして集計した。実際には1人の回答者が数曲を思い描いていた可能性もあるし、逆に複数の回答者が同じ曲を思い描いていた可能性もあるので、曲名を答えてもらった場合よりも数曲、曲数が少なく、あるいは多くなっている可能性は否定できない。

5. 分析結果

(1) 高校生44人の回答

「日本の音楽」

回答総曲数：44曲

教科書掲載曲：少なくとも19曲

①日本の伝統音楽	1
②唱歌タイプの曲	14
③歌謡曲	25 (うち J-pops 19)
④外国曲	2
⑤テレビ・映画のテーマ	5
⑥県歌・市歌・校歌	1
⑦その他	1 (ラジオ体操)
⑧不明	1 (おそらく J-pops)

教科書に掲載されたことが確認できた曲は少なくとも19曲あり、そのうち14曲が唱歌タイプの曲、2曲が外国曲、歌謡曲、伝統音楽、番組テーマが各1曲ずつである。また、2人以上の回答があった曲は以下のものであり、ほとんどが教科書に掲載されたことがある曲である。

君が代	21人
さくらさくら	19人
赤とんぼ	15人
荒城の月	10人
ふるさと	9人
朧月夜	6人
花	5人
チューリップ	3人
上を向いて歩こう	3人
蛍の光、こいのぼり、夕やけこやけ、泳げ！たいやき君、世界に一つだけの花	2人

「好きな音楽、よく聴く音楽」

回答総曲数：150曲

教科書掲載曲：0曲

①日本の伝統音楽	0
----------	---

②唱歌タイプの曲	0
③歌謡曲	125 (全て J-pops)
④外国曲	9 (ポップスと番組挿入歌)
⑤テレビ・映画のテーマ	8 (全てアニメテーマ)
⑥県歌・市歌・校歌	0
⑦その他	0
⑧不明	8 (題名から③⑤④いずれかの曲だと思われる)

2人以上の回答者があった曲は次の18曲である。

さくら	5 (歌手に二通りの可能性がある)
粉雪	5
ハネウマライダー	3
Innocent world	3
AM11:00	3
純恋歌	3
天体観測	3
大好きだよ	3

あなた、Song for…、手紙、プラネタリウム、First Love、Tomorrow never knows、Orange、Baby baby、しるし、ポケモンマスター 各2

(2) 60歳以上の人38人の回答

「日本の音楽」

回答総曲数：123曲

教科書掲載曲：少なくとも50曲

①日本の伝統音楽	28
②唱歌タイプの曲	45
③歌謡曲	38 (このうち演歌19、浪花節1、ラジオ歌謡3。全て重複なし)
④外国曲	5 (全て教科書・小学校歌集掲載曲)
⑤テレビ・映画のテーマ	0
⑥県歌・市歌・校歌	0
⑦その他	4 (軍歌1、日本人作曲の組曲3)
⑧不明	3

2人以上の回答者があったのは次の26曲で、3人以上の回答者があった上位12曲は全て教科書掲載曲である。

荒城の月	18
さくらさくら	17
ふるさと	14
赤とんぼ	9
花	6
春の小川	5

君が代	5
春の海	4
黒田節 ²	4
朧月夜	4
ソーラン節	3
海	3

かあさんの歌、我は海の子、小原節、五木の子守唄、からたちの花、桃太郎、富士山、
浜辺の歌、仰げば尊し、大きな古時計、蛍の光、お正月、一月一日、油谷音頭 2

「好きな音楽、よく聴く音楽」

回答総曲数：110曲

教科書掲載曲：少なくとも9曲

①日本の伝統音楽	6
②唱歌タイプの曲	6
③歌謡曲	68 (うち演歌44、浪花節4)
④外国曲	26 (うちクラシック19、中国民謡1)
⑤テレビ・映画のテーマ	0
⑥県歌・市歌・校歌	0
⑦その他	1 (軍歌)
⑧不明	3

2人以上の回答者があったもののうち、具体的な曲名があがったのは4曲、人名、ジャンル名
がそれぞれ3である。

千の風になって	5
昴	2
ふるさと	2
涙そうそう	2
美空ひばり	4
村田英雄	2
ショパン	2
民謡	3
童謡	3
演歌	3

6. 高校生と60歳以上の回答の比較と考察

(1) 「日本の音楽」

	高校生	60歳以上
総曲数	44	123
①日本の伝統音楽	1 (2.3%)	28 (22.8%)
②唱歌タイプの曲	14 (31.8%)	45 (36.6%)
④の外国曲も含めた場合	16 (36.3%)	50 (40.7%)

③歌謡曲	25 (56.8%) (J-pops19) 3曲のみ複数人回答 J-popsのみでは43.2%	38 (30.9%) (演歌19、浪花節1、ラジオ歌謡3) すべて1人ずつの回答
④外国曲	2 (4.5%) (いずれも教科書の曲)	5 (4.1%) (いずれも教科書・学校用歌集の曲)
⑤テレビ・映画のテーマ	5 (11.4%)	0
⑥県歌・市歌・校歌	1	0
⑦その他	1 (ラジオ体操)	4 (軍歌1、組曲3)
⑧不明	1 (おそらくJ-pops)	3
教科書掲載曲	19 (43.2%)	50 (40.1%)

以上から、高校生および60歳以上の人たちにとっての「日本の音楽」に占める唱歌タイプの曲の割合は、それぞれ31.8%と36.6%であり、僅かに減少は見られるものの世代間の差はさほど大きくはないことがわかる。また、外国曲として分類されたものも、教科書に継続して掲載されてきた曲であり、回答者の多くは日本で作曲された唱歌タイプの曲と区別をしていないことが多い。参考までにこれらの曲も唱歌タイプの曲に加えてみると、36.3%と40.7%となり、世代間の差はわずかではあるがさらに縮まる。

さらに回答の内容を見てみると、上位7曲に関しては下記のようになり、高校生、60歳以上ともに回答した曲がほぼ重なっていることがわかる。これらは全て教科書掲載曲であり、世代を越えた「日本の音楽」のアイデンティティー作りにおける教科書の影響力の大きさがうかがわれる。これら7曲のうち、伝統音楽に分類されるのは「さくらさくら」と「君が代」であるが、「君が代」については、音楽自体は近代への転換期に日本の近代化を意図して作られた曲なので、その他の5曲と同じ分類にするという判断も可能である。つまり世代を越えて多くの人が「日本の音楽」として共有しているアイデンティティーは、近代化以降に西洋音楽の普遍性を取り入れることを目指して作られた音楽が主流ということになる。

「日本の音楽」上位7曲比較

高校	60歳以上
君が代 21人	荒城の月 17
さくらさくら 19人	さくらさくら 17
赤とんぼ 15人	ふるさと 14
荒城の月 10人	赤とんぼ 9
ふるさと 9人	花 6
朧月夜 6人	春の小川 5
花 5人	君が代 4

この中での違いは、それぞれの世代にとっての「君が代」と滝廉太郎の位置づけの違いである。60歳以上の人たちにとっての「日本の音楽」の代表が滝廉太郎であったのに対し、高校生ではちょうどそれと入れ替わるようにして「君が代」が代表になっているのである。これもまた、戦後音楽教育の中で一貫して「君が代」を教え、特にこの20年ほどの間に「国歌」として

教科書掲載をしてきた結果であるといえる。

「唱歌タイプの曲」に限定してみた限りでは上記のような世代を越えた共通点がある一方で、回答全体を見ると次のような違いがある。60歳以上の人たちの間でこのカテゴリーの曲が「日本の音楽」の中で最も多くの割合を占めているのに対し、高校生にとっての「日本の音楽」としては歌謡曲の56.8%のほうが圧倒的に多いのである。歌謡曲の中の一曲は「上を向いて歩こう」であり、長い間教科書に掲載されてきたために現代の高校生は唱歌タイプの曲と認識している可能性もあるため、この曲の分類カテゴリーを変えてみたが、それでも歌謡曲は54.5%で圧倒的に多い。歌謡曲の中から J-pops のみを取り出してみても43.2%であり、これだけで唱歌タイプの曲を上回ることになる。

この違いの大きな原因は高校生の回答における伝統音楽カテゴリーの曲の極端な少なさである。60歳以上の22.8%に対し、高校生では2.3%と、10分の1しかない。高校生にとっての「日本の音楽」の中からは、伝統音楽は消えつつあり、この空きを埋めるのが J-pops であり、テレビ番組やアニメ映画等のテーマ音楽なのである。

回答の詳細を見てみると、60歳以上の回答した歌謡曲38曲には全く重複が見られなかったが、高校生の回答の中には3曲（上を向いて歩こう3、世界に一つだけの花2、泳げ！たい焼き君2）の複数回答があった。この世代が共通して「日本の音楽」と認識する曲が、歌謡曲の中からも生まれつつあるのかもしれない。

(2) 「好きな音楽・よく聴く音楽」

	高校生	60歳以上
総曲数	150	110
①日本の伝統音楽	0	6 (5.5%)
②唱歌タイプの曲	0	6 (5.5%)
③歌謡曲	125 (83.3%) (全て J-pops)	68 (62.0%) (演歌44、浪花節4)
④外国曲	9 (6.0%) (ポップス、番組挿入歌)	26 (23.6%) (クラシック19)
⑤テレビ・映画のテーマ	8 (5.3%) (全てアニメテーマ)	0
⑥県歌・市歌・校歌	0	0
⑦その他	0	1 (1.0%)
⑧不明	8 (5.3%) (③④⑤のどれか)	3 (3.0%)
教科書掲載曲	0曲	9

「好きな音楽・よく聴く音楽」では、いずれの世代においても③の歌謡曲が圧倒的に多い割合となったが、高校生で83.3%であったのに対し、60歳以上では62%であり、この質問に対しても60歳以上の人々の方が回答したカテゴリーにばらつきがあることがわかった。60歳以上の人々の回答で歌謡曲について多かったのは外国曲の23.6%で、中でも西洋クラシックが多い。また、伝統音楽と唱歌タイプの曲にも5.5%ずつの回答があったが、高校生ではいずれも0である。逆に高校生で5.3%の回答があったテレビ・映画のテーマは、60歳以上の人たちでは0である。

歌謡曲の内容を見てみると、高校生では全曲が J-pops であったが、60歳以上では演歌が44曲で最も多かった。しかし60歳以上ではその他に浪花節、演歌以外の歌謡曲、フォークや

J-pops もあり、歌謡曲の中でも高校生よりは多様な好みをもっている。同様のことは外国曲に関してもいえ、高校生の回答が欧米のポップスと番組挿入歌だったのに対し、60歳以上ではクラシック、ジャズ、シャンソン、中国民謡など、いろいろな曲が入っている。これが時代による違いなのか年齢による違いなのかをはっきりさせるためには、現在の高校生が60歳になるのを待たなければならない。

以上のことからわかるのは、「日本の音楽」として認識されていた曲のうち、歌謡曲以外のカテゴリーの曲は、高校生は全く、60歳以上の人たちもほとんど、私的な空間では聴かないということである。そして私的な空間で聴く音楽の中にも複数の人が好んで聴く曲がかなりあり、この中から将来「日本の音楽」になっていく曲が出てくる可能性がある。

7. 結 論

学習指導要領が「日本のうた」として強調する音楽のうち、唱歌や童謡などは世代を越えて日本の音楽として認識されている。これらは近代化以降学校教育が作り出してきた公の「日本の音楽」文化としてほぼ人々の間に根付いたといえよう。その一方、民謡やわらべ歌などの近代化以前の音楽の特徴をもつものは、高校生には既に「日本の音楽」として認識されないほどに衰退している。60歳以上の人たちが地元の民謡やわらべ歌を地域レベルの共通音楽文化としてもっていたのに対し、高校生世代にはこの地域レベルの共通音楽文化は失われているのである。つまり既に西洋音楽の形式をもつ「日本のうた」は継承されているが、そうではない「日本のうた」は高校生にとっては日本のうたではなくなりつつあるといえる。また、私的空間で聴かれる音楽は、伝統音楽から演歌、さらにJ-popsへと変化しており、高校生にとってはJ-popsが国家が教育を通して作り出す音楽文化以上に「日本の音楽」として認識されるものになっている。マスメディアによる音楽文化の西洋大衆音楽化が進行しているといえよう。

最後に、今回の調査は質問紙によるものであったが、60歳以上の回答者に対面式で記入してもらう間に、様々な話を聞く機会を得た。その中で明らかになったのは、捕鯨の禁止や自治体の統合などが地域レベルの共通音楽文化を衰退させることに一役かっているということである。「鯨唄」は生活の中で歌われるものではなく保存されるものとなり、保存会が小学校で教える活動をしている。しかし、小学校の統合によって他地域のこどもたちも通うようになったため、一地域のみ伝統的な音楽を教えることが難しくなったということであった。生活の変化とともに音楽文化は確実に変化をしていく。

-
- 1 分析の結果では、「日本の音楽」は近代化以前から継承されているスタイルをもつ音楽をさす場合に用いられることが多く、「我が国の音楽」は近代化以前以後に関わらず日本に存在してきた音楽全体を指す場合、「郷土の音楽」は日本国内の特定の地域で近代化以前から継承されてきた音楽を指す場合に用いられることが多かったが、質問紙調査の結果では、回答者は必ずしもそのようにはとらえていない。
 - 2 越天楽と黒田節に関しては、回答者の答えたとおりに別の曲として数えている。

参考文献

- Campbell, Patricia Shehan (1995) “Bell Yung on music of China” *Music Educators Journal*, vol.81, no. 5, pp. 39-46.
- Ho, Wai Chung (2002) “Musical behaviour of young Hong Kong students” *Educational Research Journal*, vol. 17, no. 2, pp. 197-217.
- 石井由理 (2004) 「公式の知識としての音楽」『山口大学教育学部研究論叢』第54巻第3部, 101-110.
- 石井由理 (2006) 「小学校音楽教書掲載曲の変遷にみる文化的アイデンティティー」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第22号, 173-183.
- Ishii, Yuri and Mari Shiobara (2007) “A quest of Japanese-ness in the Japanese music curriculum” 山口大学人文学部 異文化交流研究施設『異文化研究』vol. 1, 28-36.
- 石井由理 (2008) 「音楽的アイデンティティー創造の試みと結果」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第25号, 143-154.
- Maryprasith, Primrose (1999) *The Effects of Globalization on the Status of Music in Thai Society*. Unpublished Ph.D. thesis, Institute of Education University of London.
- 文部科学省 (2008a) 「小学校学習指導要領」.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/sho/index.htm 2008年9月3日保存。
- 文部科学省 (2008b) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf 2008年9月3日保存。
- Shah, Shahanum Mohamad (2006) “The effects of musical style, gender, ethnicity and musical training on the music preferences of Malaysian students”. A paper presented at the 27th International Society for Music Education World Conference, Kuala Lumpur, 16-21 July, 2006.
- Shiobara, Mari and Yuri Ishii (2006) “University students’ perceptions of terms applied to Japanese music”. A paper presented at International Society for Music Education 27th World Conference, Kuala Lumpur, 16-21 July, 2006.